

各大学におけるESDへの取組み状況とユネスコスクール等に対して  
提供可能な支援措置に関するアンケート調査 回答票

学校名 富山県立大学

ホームページ : <http://www.pu-toyama.ac.jp/>

担当者

(職名) 事務局教務課主事

(氏名) 角藤 譲

(連絡先) E-mail : [kakudo@pu-toyama.ac.jp](mailto:kakudo@pu-toyama.ac.jp)

電話／Fax : 0766-56-7500/0766-56-6182

(注) 本調査を補完するような資料がある場合には、必要に応じ添付してくださるようお願  
いいたします。

1. 各機関における既存の活動

(1) ESDに関連する学内教育活動について、講義名、対象学生の種別等をご記入ください。

番号	講義名	担当教員名	概要
1	環境論 I	各専門科目 の教員	<p>○環境問題を自然科学的側面から体系的に学習する。本講義は、公害と環境問題、大気・水環境、日本海学、地圏環境等、様々な自然科学的な知見から、環境問題を読み解く能力を養う点が、“自ら課題を見つけ、自ら考える”といったESD的視点を補うものと考える。</p> <p>○工学部1年次生必修科目（約250名が受講）・2単位</p> <p>○修了要件：全15回（期末試験を含む）の3分の2以上の出席、かつ、期末試験により単位認定を行う。</p>
2	エコツアー I	引率担当教員	<p>○富山県の自然、歴史、環境問題への取組み等について体験的に学ぶため、室堂・弥陀ヶ原を舞台に自然体験学習を実施する。当日は、県内ナチュラリストの自然散策ガイドより、学生は人と自然とのつながり等についての考えを熟成させる。環境、地域、歴史等をテーマに、持続可能な社会を築く力を育む。</p> <p>○単位化されたフィールド体験で、環境論 I の講義内2回の出席評価の一部（1回：オリエンテーション、基調講演を含む）となる。</p> <p>○活動実績（平成24年度）：283名（工学部一年次生239名、教職員・ナチュラリスト44名）</p> <p>※平成24年度より単位化（成績評価の一部）となり、平</p>

			<p>成25年度も引き続き継続する。なお、本事業は、平成18年度より実施している。</p> <p>○平成25年度より、ESDへの展開を試み、「外来種植物除去活動」を、活動の一部に盛り込む予定である。この活動は、地元ナチュラリスト、県の自然保護センターの協力の下、実施する。この活動を通して、“環境に対する問題意識や倫理観の醸成”をより一層深めるだけでなく、現場における自然保全活動を通して、環境問題を理解し、持続可能な社会の形成に向けて、各々学生が考える力を養うものとするESDへの展開に大きく寄与するものと考えている。</p>
3	ひまわり大作戦	担当教員	<p>○工学部の1年次生が中心となって、ひまわり栽培やBDF(バイオディーゼル燃料)の製造体験を通じて、地球温暖化問題やバイオマスエネルギーなどの身近な資源について、考え・学び、資源の大切さや環境問題への関心を高めてもらおうとするものである。持続可能なエネルギーに関する知識・能力を養うことはもちろん、活動に積極的・自主的に参加するといった“自律的な行動能力”を身につけることも目的としている。</p> <p>○ひまわりの種まき(6/1実施)は、工学部1年次生全員参加のプログラムとし、環境論Iの成績評価の一部とする。</p> <p>○活動実績(平成24年度)：</p> <p>種まき…249名/253名(環境論I受講者)、ひまわりサークル17名、ひまわり委員10名、引率教員10名、射水市役所・農事組合法人ファーム大島職員</p> <p>その他活動…草刈り、迷路作成、摘花作業等を、1年生分担活動として、参加を呼び掛けたところ、約100名の学生が、参加をした。</p> <p>※平成25年度も、本事業を継続するだけでなく、ひまわり生育等の活動の拡充をし、体験学習機会の増幅をすることで、学生の環境に対する理解を一層深め、また、地域貢献に対する意識の向上を期待している。</p>
4	環境論II	各専門科目の教員	<p>○本講義は、環境史、イタイイタイ病、枯渇性資源問題、環境心理学等、環境問題を社会科学的・技術的側面から体系的に学習することで、人々の暮らしや社会・経済活動を見直すことができる。つまり、環境問題を通して、地域社会の課題について学習することで、持続可能な社会づくりに関する読み解力を身につけることが出来ると考える。</p>

			<p>○工学部2年次生必修科目（約250名が受講）・2単位</p> <p>○修了要件：全15回（期末試験を含む）の3分の2以上の出席、かつ、期末試験により単位認定を行う。</p>
5	エコツアーⅡ	担当教員	<p>○工学部三年次生(環境工学科を除く)が、県内企業等の環境問題への取り組みを視察し、講義で得る知識・技術が地域でどのように活用されているかを学習する。講義で身につけた知識が、県内企業で、どのように活用されているのか視察し、持続可能な社会を築く力を育み、課題解決能力を養う。</p> <p>○活動実績(平成24年度)：</p> <p>機械システム工学科(株)アイシン軽金属射水工場参加者26名</p> <p>知能デザイン工学科三協立山(株)三協アルミ社射水工場参加者38名</p> <p>情報システム工学科ハリタ金属(株) 射水リサイクルセンター参加者21名</p> <p>生物工学科中越パルプ株式会社高岡工場参加者34名</p> <p>○単位（選択） 基本的には自由参加であるが、各学科極力全員参加を求めるフィールド実習型の演習である。</p>
6	フィールド実習	担当教員	<p>○豊かな自然・流域環境を舞台に、実践・体験を通じて多様な視点から水循環をめぐる課題と解決の手法を学習する。講義で身につけた知識が、県内企業・機関で、どのように活用されているのか視察し、持続可能な社会を築く力を育み、課題解決能力を養う。</p> <p>○環境工学科四年次生、前期必修科目。受講生40名。</p> <p>○単位（必修） 1単位となるフィールド実習型の演習である。</p> <p>○成績評価：学習態度（30%）、レポート（70%）</p>
7	トピックゼミ	担当教員	<p>○各担当教員の専門分野における課題をもとに進行し、大学での研究に向けた、初学年次向けのゼミナールである。</p> <p>一部のゼミナールでは、環境配慮型の企業への訪問し、それをテーマにワークショップでのディスカッション、問題抽出などを行い、持続可能な社会を築く力を育み、課題解決能力を養う。</p> <p>○全学科2年次必修</p> <p>○各ゼミナール：15名（全学科240名対象）</p> <p>○単位（必修） 1単位</p> <p>○成績評価：各担当教員によって異なる。</p>

			(例) ゼミへの参加度 (30%)、レポート (40%)、発表 (30%)
8	環境講演会の開催	講師を招聘しての実施 (各教養科目の担任)	<p>○本学の学生に環境問題に関する知識や問題意識を持たせるために、環境リテラシー形成の一環として毎年実施している。平成24年度は、「少子高齢化時代の経済と環境問題」と題して、横浜市立大学グローバル都市協力研究センター特任教授の井村秀文氏をお招きし、少子高齢化時代における問題、課題について、言及していただいた。</p> <p>○本事業は、毎年、様々な分野で活躍されている講師の方を招聘し、学生が環境問題を複合的に捉える視野を広げることを期待し、ESD展開へ大きく寄与している。</p> <p>○主に、本学学生を対象。他には、一般、企業、各種関連機関関係者が対象。</p> <p>○各種ゼミナールにおいて、担当教員がゼミの一環として、学生に参加を呼びかけている。特に、1年生ゼミの出席率は約8割を超えており、</p> <p>○活動実績 平成18年度より、年に1回実施している。毎年250～300人（学生、企業、各種関連機関関係者）が参加している。</p>
9	ISO14001内部監査員養成セミナー	外部講師	<p>○本学学生を対照に、ISOの規格要求事項やEMS監査等について学習する。内容は、講義だけでなく、大学における環境影響と環境側面の実地視察や、グループワークによる環境影響と環境側面の抽出を行う。最後に、基礎的事項について効果テストを行っている。</p> <p>○特別講座として、休日を利用して実施しており、単位化をしていないが、講座を修了した証として、効果テストをパスした学生には、本学が定める、修了証明書を発行している。</p> <p>○講師：鶴田佳史氏（大東文化大学環境創造学部環境創造学科専任講師※平成24年度役職）</p> <p>○活動実績 毎年1回行い、平成19年度より実施している。参加者は、約30名、また本学工学部の各学科（機械システム工学科、情報システム工学科、知能デザイン工学科、生物工学科、環境工学科）より、幅広く参加している。平成24年度は、40名がこれに参加し、40名全員に修了書を表彰した。</p> <p>○ESDへのかかわりとして、講義で得る知識・技術が企業でどのように活用できるかを学習し、実地視察やグループディスカッションを通して、持続可能な社会を築く</p>

			ための力を育み、課題解決能力を養うことに寄与していく。
--	--	--	-----------------------------

(注) 概要欄には、講義のESDとのかかわり、認定単位数、修了要件への該当、受講者の種別、受講者数等を記載する。

(2) ESDに関する研究活動について、ご記入ください。

工学部環境工学科において、環境科学（大気、水、土壤への化学物質等の影響及び生態系への影響）及び環境に配慮した各種計画に関する研究を包括的に行い、また、資源循環・廃棄物処理、環境政策・環境経営・環境教育の研究を行う。また、かかる分野における国際協力も行っている。学科の教育の目的は持続可能な社会構築への貢献であり、ESDと大きく関係する分野である。

以下がESDに関する発行された論文であるが、他にも関連分野では多いと考えている。

九里徳泰・大西可奈子・渡辺幸一・林節男・楠井隆史,富山県環境リテラシー教育モデルの実施と評価—富山県立大学における全学環境教育を事例として—,環境科学会誌（環境科学会）, 24巻6号,531-539頁,2011年11月

九里徳泰,持続可能性教育(Sustainability Education)の展望,富山県立大学紀要 21, pp56-62,2011-03

川上智規,奥川光治,安田郁子他,健全な水循環を理解するための大学における流域環境教育プログラム,Journal of ecotechnology research 14(3), 207-214, 2009-01

楠井隆史,県立大学の環境影響に対する学生の認識と評価,富山県立大学紀要 10, 130-137, 2000-03-31

(3) ESDに関する地域貢献活動について、ご記入ください。

- ① 初等中等教育へのESD教育支援活動が行われている場合、内容をできるだけ具体的に記述してください。
  - ・出前授業等の教員・学生による専門的知見の提供があれば記述してください。  
対象（高校、中学校、小学校、幼稚園・保育園、その他）

1. 富山市ファミリーパークにおいて就学前児童、小学生向けのESD教育活動をファミリーパーク公社と教員と学生の協働による実施・展開をH25年度実施予定。富山市ファミリーパーク公社と富山県立大学で教育に関する包括提携を書面で結ぶ予定である。

2. “1.各機関における既存の活動”にある、『ひまわり大作戦』の前身にもなる、以下の初等中等教育へのESD教育支援活動について、富山県立大学内HP－ひまわり大作戦HPの記事より、抜粋し、紹介することとする。

(記事元：<http://eco-sunflower.com/sfp-example/eg-01/>)

## ひまわりの種から、油を搾ってみよう

---

ひまわりプロジェクトの実行にあたっては、近郊の3つの小学校（歌の森、太閤山、中太閤山）に協力をお願いしています。

2010年1月28日（木）、中太閤山小学校を、尾仲と中島で訪問し、4年生の児童に集合してもらい、採集したひまわりの種の搾油を体験してもらいました。多分、油を搾る体験は皆さん始めてではなかっただろうか。わいわいと楽しく搾油の体験をしてくれました。

中太閤山小学校へは、5月に児童への地球温暖化対策の必要性を啓蒙する出前講義を行なっています。まずはスライドで、そのときの復習です。

種を撒いてひまわりを栽培し、花を咲かせ、種子を実らせました。収穫した種の重さを計ってみると、全部で4.2kgありました。この種子からひまわり油を搾ってみましょう。

両手で一杯程の種（約100g）をシリンダーの筒に入れ、搾油機のハンドルを回すと、ゆっくり、ゆっくりとピストンがおりてきます。最初は楽にくるくると回せたハンドルですが、だんだんとハンドルが重たくなってゆき、思わず力が入ります。最終的には種を入れた部分に約5トンの圧力がかかり、種を押しつぶして油が搾れます。

気がつくと、筒とピストンの間から油がしみでてきました。みんな大歓声です。最後の一滴まで搾ろうと、みんなで一生懸命ハンドルを回しました。最後はハンドルをちょっと動かすのも大変でしたね。



さて、どのくらいの油がとれたのでしょうか。メスシリンダーで計ってみると、取れたのは10mL程度の黄色い透明の油でした。取れた量は思っていたより少なかったのではないでしょうか。

収穫した種子を全部搾ったら、どのくらいの油がとれることになるのか、計算してもらいました。

4.2kgの種から、420mLの油がとれることになりますね。たくさんあると思った種ですが、油にすると500mLのペットボトル一本にしかなりませんでした。これをバイオディーゼルに変換して自動車を動かしても、だいたい4~5kmしか走れません。苦労してひまわりを育てた割にはほんのちょっとです。

「ひまわりから育てた油で実際に得られる燃料は、ごくわずかです。エネルギーを生み出すのは大変なこと。だからこそ、エネルギーは大事にしないといけない」こと、児童の皆さんのが実際に体験してわかつてくれましたでしょうか。

搾油の最後は、質問の時間です。「ひまわりの油は車を動かす以外に何に使えますか?」「ひまわり以外に油のとれる植物はなんですか?」「どうすれば搾油機が作れますか?」「搾ったカスを土に撒いてもひまわりが育ちますか?」などなど、次々と質問が飛び出し、大盛況でした。

この活動を通して児童のみなさんが体験し、実感したさまざまなことは、どれもとても大切なことだと思います。ぜひこの体験を今後につなげてください。また来年も、ぜひ中太閤山小学校でひまわりの栽培を続けてください。よろしくお願ひします。



〈文章：中島範行 富山県立大学教授〉

- ・小中学校等の学校と共同で学生が実施する活動があれば記述してください。  
(例えば街路のゴミ拾い等)  
なし

- ・ESD推進に資する教材開発があれば記述してください。

開発された教材：

○ひまわり大作戦における、教材開発としての種まきと、BDF(バイオディーゼル燃料)製造実験の展開

平成23年度より、環境論I(1年次生必修科目)の一部として、ひまわり大作戦種まきを成績の評価として、組み込んでおり、かつ、ESD推進に資する教材として、捉えている。学生は、1時間程度の種まき活動を通して、自然体験や自然観察を通じ、エネルギーを作り出す大変さを身を持って学ぶことが出来る。現在、単位取得に係るものとしては、ひまわりの種まきのみであるが、種まき以後の生育活動として、1年次生の学生分担活動(自主参加)が、展開される。この活動に、総勢約100名の学生が、迷路作成や草刈り、摘花作業に参加した。そして、この分担活動の一部として、ひまわり種子から搾った油を用いて、BDF製造実験を実施している。

このBDF製造実験については、平成23～24年度は、選択制の参加活動として、自主的に参加した1年次生約20名での実施となつたが、平成25年度より、本学生物工学科の科学実験演習カリキュラムの一部として、BDF製造を実施することが見込まれており、更なる教材開発として期待される。

○エコポイント制度の実施

エコポイント制度とは、本学が独自に設けた、学生の在学中4年間の環境活動に対し、表彰する制度で、学生は、学内外における環境に関する学習や諸活動に参加し、それらを自主的にシステムに記録し、エコポイントを取得するものである。目的は、環境リテラシー形成の評価指標にするとともに、学生の学習意欲を高めるためのインセンティブとして、また就職活動等の企業に対する自己アピールのツールとして活用してもらうこと。ESDで大切とされている視点として、地域社会や地球の課題に対して、協力して解決策を生み出す中、「自分で考え、感じ、行動する力」を養うことが必要である。本制度を活用することで、学生の環境・地域活動に対する主体性・積極性を引出すことが出来、先述した能力を養える点において、ESDと大きく関係すると考える。

活動実績として、本制度は、平成21年度より制度設計、準備をして、平成22年度より稼動した。そして、平成24年度に、制度実施初年度の学生が卒業し、4年間の環境活動に対する評価として、本学が定めた基準を満たした学生を表彰した。一定の基準を満たした学生には、“エコスチューデント”、その中でも

特に優れた学生には“環境マイスター”といった称号を付与した。環境マイスターに関しては、本学学長が認めた学生へと授与されるため、非常に名誉ある賞として表彰した。

※表彰者人数

エコスチューデント：43名

環境マイスター：2名

表彰を機に、各種メディアを利用して（平成24年度は、表彰に関する記事を地元新聞紙に取り上げられた）、学内外に広報し、一層のエコポイント制度活用の促進、定着を図り、学生の環境活動に対するインセンティブを高める教材として、発展させていく。

また、本評価システムを企業等の学外へ周知を広めることで、学生の活動に関する情報公開が活発となることが考えられる。企業側としては、環境活動、ESDによって育まれる力を図る効果的なシステムとして活用していただき、また、学生には、それを踏まえて、自発的に学内外を問わず、多くの経験と学びを得ることを期待する。

- ・ESDを選択できるような社会人向け（大学院）コースはありますか？  
ある場合、内容をできるだけ具体的に記述してください。

大学院工学研究科環境工学専攻・資源循環工学・環境政策学部門において、コース制はとっていないが、社会人向けの環境・ESD教育研究の指導及び修士学位取得への指導を行っている。

- ・ESDを対象とする教員免許状更新講習科目があれば記述してください。

なし

- ② ESD分野でのその他の地域貢献活動はされていますか？

例：公民館や博物館等との連携活動

○富山県立大学「ダ・ヴィンチ祭」の開催(毎年8月)

概要…次代を担う子供たちの科学への関心を高め、豊かな創造性や可能性を育むことを目的に、平成8年から毎年開催している。

イベント当日は、教員や学生が日頃の研究内容を紹介・発表する「大学探検隊」や、「アザラシ型癒しロボットパロと遊ぼう！」、製作教室「ザリガニロボットを作ろう」など多数の企画を実施し、子どもたちとふれあいながら科学の面白さを伝えています。次代を担う子供たちの科学への関心を高め、豊かな創

造性や可能性を育むことを目的としています。全学教員・事務局員・大学生挙げての一大イベントである。

ESD分野との関連…次代を担う子供たちの科学への関心を高め、豊かな創造性や可能性を育むことを目的としており、県内、地域の子どもたちを対象に、持続可能な社会を築く力を育む一助となることを期待するだけでなく、更には、大学生一人ひとりが、地域貢献活動に参画することで、「未来の担い手づくり」につながっていると言える。

○ひまわり大作戦「ひまわり迷路（30a）の一般公開」（7月下旬～8月中旬）  
概要…ひまわり大作戦では、工学部の1年次生が中心となって、ひまわり栽培やBDF（バイオディーゼル燃料）の製造体験を通じて、地球温暖化問題やバイオマスエネルギーなどの身近な資源について、考え・学び、資源の大切さや環境問題への関心を高めてもらおうとするものである。持続可能なエネルギーに関する知識・能力を養うことはもちろん、活動に積極的・自主的に参加するといった“自律的な行動能力”を身につけることも目的としている。

そして、ひまわり大作戦のうちの1つ、迷路の一般公開では、富山県立大学の学生と、大学職員、教員で、育てたひまわり畑に迷路を作成した後、地域の保育園を招待し、迷路公開を皮切りに、地域の人々に自由に楽しんでもらう、という事業を展開している。

ESD分野との関連…地域の子どもたちを主な対象として、ひまわりで出来た迷路を楽しんでもらうことで、自然に親しみ、外で活発に遊んでもらうこと目的としている。ダ・ヴィンチ祭では、ひまわり迷路を中心に、大学の学生が、地域の小学生と触れ合い、世代間交流を味わってもらう。地域の小学生は、自然と触れ合う楽しさから、自然の大切さ等を学び、大学生は、小学生にひまわり大作戦の趣旨や、ひまわりからエネルギーを作り出す過程を伝えることで、更に環境問題やバイオマスエネルギーに対する関心を高めることを期待している。

## 2. 上記以外で今後、各機関が提供できるESD分野のサービス

- ・専門的知見の提供・教員への助言（例えば防災教育、国際理解教育等）
- ・出前授業
- ・教材の提供
- ・（〇〇分野の）カリキュラムの共同開発 等

上記のようなサービスを提供されている場合、具体的に記述してください。

○富山市環境未来都市プロジェクトにおけるフィールドミュージアム形成プロジェクトでのESDの展開。

「環境未来都市」構想は、平成22年6月に閣議決定された国の新成長戦略に位置づけられた「21の国家戦略プロジェクト」のひとつで、国が限られた数の都市・地域を「環境未来都市」として選定し、そこで環境や超高齢化等に対応した技術やまちづくりの面で優れた成功事例を創出するとともに、それを国内外に普及展開することで、需要の拡大や雇用の創出等を目指し、究極的には我が国全体の持続可能な経済社会構造の実現を図るというもの。富山市は、平成23年12月に全国11の都市・地域のひとつとして「環境未来都市」に選定された。サービスを提供は、呉羽丘陵での「人と自然との共生&再生可能エネルギー」フィールドミュージアム形成事業における市民へのESD教育の提供となる。

富山市ファミリーパーク（公社）における既存の環境教育プログラムを見直し、富山県におけるESDとして整理する。また、富山県ならではのESDプログラム開発を試みる。※本事業は、富山県立大学工学部環境工学科 九里徳泰教授が主たる事業を行う。

○都市圏大学と地元地域の交流における教材の開発とESDへの展開

総務省域学連携地域活力創出モデル実証事業への採択が決まり、大東文化大学（東京）と富山県立大学の学生を、南砺市五箇山へ集め、地域の課題解決に向けて、現地で10日間の合宿を行い（1年間のうち計3回実施）、地域の人や外部講師による講義やフィールド実習を行う。

本事業を通して、持続可能な社会を形成するための力を育むだけでなく、大学生におけるESDプログラムを整理し、ESDの更なる発展に寄与することを考える。

### 3. 各機関におけるESDの持続性を支援するための体制

- ・例えば教員研修（FD）、職員研修（SD）を活用した学内におけるESDの周知方策

#### ○『平成21年度 環境教育教員セミナー』

##### ・趣旨

平成19年度文部科学省「現代的教育ニーズ取組支援プログラム」（現代G P）に選定された「富山型環境リテラシー教育モデルの構築」の取組みの一環として、本学教員を対象にESD教育のセミナーを開催し、本学の環境教育の向上に資するもの。

##### ・講師

阿部 治氏（立教大学教授、日本環境教育学会会長、ESD協会代表理事）

##### ・セミナー内容

- ①基調講演（1時間）「DES D後半に向けたHES Dの課題」
- ②討論会（1時間）

##### ・参加者

25名（富山県立大学教員）

#### ○『平成24年度 富山県立大学産学官連携環境シンポジウム』

##### ・趣旨

企業関係者等の環境マネジメントに対する理解を深めるとともに、本学の環境調和型先端技術開発研究、環境工学科・環境教育について情報発信するもの。平成22年度より、毎年開催している。平成24年度では、環境省総合環境政策局環境教育推進室長を招聘し、企業や大学、家庭等における環境教育の取組や環境教育人材への期待、また、今後のESD分野に関すること等、環境教育を巡る最近の状況や今後の取組み方向を交えて、説明いただいた。

##### ・セミナー内容

- ①基調講演：「企業等における環境教育の推進について」

講師 宮澤 俊輔氏

〔環境省 総合環境政策局 環境教育推進室長（併任民間活動支援室長）〕

- ②パネルディスカッション

③本学の環境教育プログラム、環境分野の研究、

地域貢献事業等に関するポスター展示。

#### 4. ESD分野での他大学との連携

##### ○高等教育機関における持続可能な開発のための教育フォーラム2012

###### ・趣旨

高等教育における持続可能な開発のための教育(Higher Education for Sustainable Development ; 以下HESDと称す)フォーラムに参加した。平成24年度は、「キャンパス・サステイナビリティ」をテーマに各機関の取り組みについて情報収集を行いESD分野における、他大学との連携を図った。また、本学からは全学横断的な環境教育プログラム、特に体験的な環境活動とエコポイント制度について発表した。なお、本学教職員は従来からも参加していたが、富山県立大学として平成23年3月に正式に参加加盟した。

なお、本学が推進する体験的な環境活動は、エコツアーIやひまわり大作戦といった、大学生が「自然体験や自然観察を通じて、大学を知識・技術の修得に留めるのではなく、地域の宝や良さを再認識する」といった、ESDの視点を取り入れた環境教育の活動を行っている。県内学生はもちろん、県外からの学生にとっても、富山県立山山麓の自然を味わう機会は少なく、また、大学内の休耕地を利用したひまわり栽培・地域貢献事業を通して、地域の人々と交流する良い機会を与えてくれる。

また、エコポイント制度とは、本学が独自に設けた、学生の在学中4年間の環境活動に対し、表彰する制度で、学生は、学内外における環境に関する学習や諸活動に参加し、それらを自主的にシステムに記録し、エコポイントを取得するものである。目的は、環境リテラシー形成の評価指標にするとともに、学生の学習意欲を高めるためのインセンティブとして、また就職活動等の企業に対する自己アピールのツールとして活用してもらうこと。ESDで大切とされている視点として、地域社会や地球の課題に対して、協力して解決策を生み出す中、「自分で考え、感じ、行動する力」を養うことが必要である。本制度を活用することで、学生の環境・地域活動に対する主体性・積極性を引出すことが出来、先述した能力を養える点において、ESDと大きく関係すると考える。

以上2点を発表することで、ESDとしての視点を取り入れた富山型環境教育モデルを、他大学へ提案することが出来たと考える。

##### ○環境人材育成コンソーシアム 交流大会の参加(加入検討)

###### ・趣旨

環境人材育成研究交流大会[主催：環境人材育成コンソーシアム (EcoLeaD)、一般財団法人持続性推進機構 (IPSuS) ]に本学教員が参加するだけでなく、ESD分野における、他大学との連携を図っている。平成24年度本大会では、日本における環境人材育成の取組みを目指し、産学官民による情報共有・意見交換を通じて、環境人材育成のビジョンの共有や教育の質の向上を図り、また、環境人材育成の意義に対する理解を広く啓蒙することを目的とし、実施された。本学からは全学横断的な環境教育プログラム、特に体験的な環境活動について、また、エコポイント制度、環境教育支

援室の機能について発表をした。

本大会を通じて、本大学と他大学とのE S D分野におけるネットワークを更に広げるため、環境人材育成コンソーシアムへの加入を検討しているところである。

## ○環境教育学会への参加

### ・趣旨

富山県立大学の環境教育推進事業の取組みについて発表を行い、合わせてE S D分野における他大学での取組みについて情報収集を行い、更にはネットワーク形成に努めている。

平成24年度第23回日本環境教育学会(東京)では、富山県立大学環境工学科九里教授より、全学横断的な環境教育プログラムを実施している本学の取り組みの中の一つである「フィールド実習」に焦点を当て、その実践と評価について発表するとともに、各団体・企業の環境教育に関する取り組みについて情報収集を行った。

なお、本年度のテーマは、「持続可能な未来をえがく環境教育」であり、各発表では、E S Dの視点を取り入れた環境教育について言及する発表が多かった。本学の発表においても、「フィールド実習」の趣旨として、知識の習得に留めず、大学で学んできた知識・技術がどのように活用・応用されているのか視察する点から、現場における演習を通して、持続可能な未来をえがくための実現性の高い教育を行っていることに言及し、「フィールド実習」を、持続可能な社会を築く力を育み、課題解決能力を養うといったE S Dの視点を取り入れた富山型環境教育モデルとして、発表を行った。

## ○名古屋大学、豊橋技術科学大学、中部大学、名古屋工業大学、愛知工業大学とのあいち環境塾

### ・趣旨

あいち環境塾とは、産業技術の集積や豊かな自然環境などの愛知の“資源”を活用した持続可能な社会づくりに向けた、“ビジョン”と“こころざし”を持ち、地域や職場で活躍できる人材を育成することを目的とし、実施している。講師に、企業、大学、行政の各分野で活躍する第一線の方々を迎え、講義、ディスカッションを通して塾生が互いに切磋琢磨し、持続可能な社会の形成という目標を共有する仲間づくりが出来るクリエイティブな場を目指している。平成20年度より始まり、平成24年度では、6回目を迎えた。以上の点を踏まえ、E S D分野と大きく関わり、また、各種機関とのネットワークづくりに富んだ活動であると考える。

富山県立大学との関わりとして、本学環境工学科九里教授が、本学の環境教育事業を紹介、本事業に関する講義を受け持つと同時に、持続可能な社会の形成におけるネットワークづくりに努めている。

## ○認定NPO法人「持続可能な開発のための教育の10年」推進会議 (ESD-J)への加入、参画

○金沢大学環境保全センター鈴木克徳先生との北陸地区のESD関連ネットワーク

○北陸における潜在的ユネスコスクール支援大学間ネットワーク加盟大学

○中部ESD拠点協議会に参画しネットワークづくりをしている

## 5. その他の関連活動

平成 25 年度 ESD にかかる事業実施予定

○都市圏大学と地元地域の交流における教材の開発と ESD への展開

総務省域学連携地域活力創出モデル実証事業への採択が決まり、大東文化大学（東京）と富山県立大学の学生を、南砺市五箇山へ集め、地域の課題解決に向けて、現地で 10 日間の合宿を行い（1 年間のうち計 3 回実施）、地域の人や外部講師による講義やフィールド実習を行う。

本事業を通して、持続可能な社会を形成するための力を育むだけでなく、大学生における ESD プログラムを整理し、ESD の更なる発展に寄与することを考える。

○富山市ファミリーパークにおける ESD プログラムの調査とプログラムの開発

富山市ファミリーパーク（公社）における既存の環境教育プログラムを見直し、富山県における ESD として整理する。また、富山県ならではの ESD プログラム開発を試みる。※本事業は、富山県立大学工学部環境工学専攻 九里徳泰教授の研究対象として、調査するものである。